

第四百十九回 青葉会 句会報

令和三年三月二十五日(木) 午後一時半〜五時 文京区民センター

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲

長谷見びん 星田啓子

投句・選句 伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 福島正明

古田昇 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 松崎浩 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

七点 住民の戻らぬ村も春迎え

そらお

(真・紀・雅・隆・正・浩・規)

◎竹の子や皮剥くやうに歳をとり

忠彦

(紀・○孤・五・健・龍・亜・浩)

銅像が歩き出しそな月朧

正明

(そ・紀・五・堂・び・○け・三)

春風や赭き裳裾に戯るる

啓子

(そ・紀・健・孝・敏・隆・規)

六点 ◎丑三つの猛き春雷天翔ける

堂哉

(孤・千・た・ゆ・昇・○啓)

春裕久し振りねと昼芝居

けい子

(○紀・○亜・堂・隆・○正・天)

◎花の夜に西行と酌む般若湯

盛雄

(紀・孤・健・正・啓・○三)

五点 春場所や業師繰り出す奇手妙手

紀久男

(堂・允・○昇・啓・盛)

リュウマチに眠れぬ春夜妣(はは)想ふ

全

(忠・敏・隆・允・盛)

朧より朧へ通ふ猫の道

孤舟

(紀・恵・○隆・啓・亜)

七分咲き愛でつ独りの花見かな

健介

(そ・紀・孝・○龍・ゆ)

若冲の墨の満月ひかる春

千恵

(真・忠・○敏・允・け)

文旦を剥く手に香る浅き春

ただしげ

(紀・○千・孝・ゆ・昇)

◎春眠の底をゆらして夜の地震

恵洲

(そ・孤・健・龍・允)

砲台のある無人島若布(わかめ)採る

正明

(真・五・び・け・天)

◎患ひの床(とこ)に届くや山桜

啓子

(真・紀・孤・敏・び)

練焼くたよりなき身をほぐし食む

亜也

(紀・ゆ・○忠・啓・け)

◎火の散華舞台を飾るお水取り

けい子

(孤・孝・○た・昇・浩)

四点 逃水を追ひ逃水に囚はるる

孤舟

(五・恵・ゆ・昇)

◎菜の花の苦み楽しむ辛口酒

忠彦

(紀・孤・た・天)

猫背また進む春寒の鏡かな

恵洲

(○孝・雅・啓・亜)

持て余す一人暮しの日永かな

規雄

(紀・龍・雅・允)

虚無僧のくらやみ坂を下る春

正明

(紀・恵・○堂・天)

縁ありし家の築山諸葛菜

啓子

(紀・隆・び・三)

啓蟄や妻病院を出て生還す

天牛

(紀・忠・健・正)

三点

開花せる古木やひとの足を止め
 子に伝う播磨屋の芸春芝居
 陽炎をもぐもぐ咀嚼牧の牛
 風掬え戦始まる風の陣
 利休忌の具足に挿せる黄一輪
 球春や敗校の校歌うたうべし
 春色の光まといて歩みおり
 花見酒酌めぬ花見となりにけり
 変わる世を追うさびしさよ梅散りぬ
 花の日々疾く移ろへり酔ひもせず
 ◎ウーバーの漕ぎ抜けてゆく花の客
 リモートもあれど卒業別れ行く
 返り血は力士の矜持風光る

そらお
 ただしげ
 孤舟
 全
 五郎太
 健介
 ゆたか
 全
 雅夫
 びん
 全
 亜也
 盛雄
 (千・雅・び)
 (紀・健・敏)
 (千・恵・啓)
 (紀・恵・天)
 (紀・昇・三)
 (紀・龍・堂)
 (紀・千・規)
 (紀・昇・盛)
 (紀・浩・盛)
 (龍・敏・允)
 (孤・亜・堂)
 (そ・忠・隆)
 (眞・紀・堂)

二点

ひとけ無き原発の村風寒し

そらお

(紀・盛)

(飯館村など帰還困難地のTV映像から)

◎春一番友の新著に祝杯を

紀久男

(孤・正)

のどけしや野鳥談議の飲み仲間

全

(び・〇盛)

花冷えやコロナ差別にいきどほる

全

(紀・雅)

あちこちを治し退院梅の花

忠彦

(〇眞・紀)

野火猛て頻りに変はる風の向き

孤舟

(恵・允)

上枝揺れ花びら零る真昼どき

五郎太

(紀・三)

晴れた空陽だまりの猫水温む

ただしげ

(浩・孝)

◎島なみの写真が届き暖かし

五郎太

(紀・孤)

春に背くとはこれ美女の大マスク

恵洲

(そ・千)

風吹けどやせがまんして春コート

千恵

(紀・浩)

満開の桜の先に蒼き天

全

(た・規)

句の友に会えぬせつなき春なるや

ゆたか

(紀・忠)

鶯やしばしコロナの憂さ晴れぬ

全

(紀・雅)

ほお白の番で遊ぶ庭の木々

雅夫

(紀・ゆ)

ムスカリは歌い出しをり春の陽に

全

(紀・け)

春の雪今日もつもるや気仙沼

びん

(紀・亜)

山の湯や近くて遠き伊豆の春

全

(紀・た)

おずおずと蟻穴を出づ春の朝

規雄

(浩・三)

一人居や春の陽を浴び風呂に入る

天牛

(紀・け)

春雷や雀ちゅんちゅん鳴き頻る

全

(紀・規)

しだれ梅大きく地を張り山の主

けい子

(〇五・た)

厄よ去れ杳鳴らす僧修二会かな

全

(紀・天)

三・一草萌ゆるとて道半ば

盛雄

(紀・た)

雨音はドレミのリズム地虫出づ

盛雄

(紀・正)

一点

コロナ禍も風評も祓えお松明（たいまつ）

紀久男

（五）

忘れたいけど忘れない三・一一

忠彦

（紀）

春の雷起きし思い出忘れざる

五郎太

（忠）

可憐可憐墓碑の蔭なる葦草

惠洲

（紀）

マスクなる耐へ難き耐へ桜かな

全

（紀）

（ロッテ佐々木朗希初登板）

153キロぴゅつと投げて春デビュー

千恵

（紀）

あては独活香りに白味噌乗せて

全

（紀）

春疾風足場崩して電車止め

ただしげ

（紀）

菜の花は今盛りなり房州路

全

（紀）

◎空目指し昨日今日明日クロッカス

堂哉

（孤）

受験の吾子目指すは豪州タラップへ

全

（紀）

瀬戸の海かもめ飛び交い風光る

ゆたか

（〇規）

春告鳥来て健やかな朝明くる

昇

（紀）

万華鏡のときめき春の光射す

全

（紀）

（檸檬忌によせて）

夜桜や白き骸の立ち上がる

啓子

（紀）

久方の水揚げ浪江の白魚

全

（紀）

変異猛け春腥し新戦場

びん

（紀）

春の雲ぼつかり浮いて睡魔呼ぶ

規雄

（紀）

【句評】

七点句

住民の戻らぬ村も春迎え

そらお

正明さん・・・辛いですね。広島と長崎には人が戻りました。しかし福島の原発の村には当分住民が戻るような状態にはならない様です。原爆より原発の方が問題の根が深いと感じます。脱原発が必要です。

隆さん・・・切れ字で余韻が欲しい。「住民の戻らぬ村や春迎え」など。

浩さん・・・帰宅困難地域にも見事な桜が咲いているのをニュースで見、切なくなりました

紀久男・・・同じマンションに浪江町出身のご夫妻と昵懇です。去年亡くなられた町長や、山形

（後に いわき）へ移った蔵元のことなど話題に飲み、似たような句も詠んでおります。

竹の子や皮剥くやうに歳をとり

忠彦

孤舟さん・・・人間若い頃から良い経験も悪い経験もすべて身内に取り込み堆積されてくる。しかし老齢期に入れば、それらのしがらみをひとつひとつ捨て去り身軽になつてゆきたい。あたかも竹の子の皮を剥くように。

浩さん・・・寂しくも向き合わなければならぬ現実の切なさが伝わります。

銅像が歩き出しそな月籠

正明

けい子さん・・・本当に銅像が歩き出しそうな春の夜がありますね。

春風や楮き裳裾に戯るる

啓子

隆さん・・・春風には、楮きより紅が合いそう。「春風や裳裾の紅（べに）に戯るる」。

六点句

丑三つの猛き春雷天翔ける

堂哉

孤舟さん・「天翔ける」で雷の凄まじさが分かる。

ただしげさん・「天翔ける」の表現が大変良いと思います

春拾久し振りねと昼芝居

けい子

正明さん・春はお着物で芝居見物でしょう。

亜也さん・華やいだ情景が目によく浮かびます。

紀久男さん・コロナ対策徹底している歌舞伎座に見物できる仕合せ。浮き立つ気持ち伝わる

好句。常套句の「春シヨール」から脱皮。

花の夜に西行と酌む般若湯

盛雄

健介さん・西行と酌めば陶然たる境地に至るでしょう。格調高いです。

孤舟さん・芭蕉も憧れた西行となら、是非私も一献傾けたい。

五点句

春場所や業師繰り出す奇手妙手

紀久男

盛雄さん・相撲ファンとして味のある一句。炎鵬・宇良らの活躍は見事。

リュウマチに眠れぬ春夜妣(はは)想ふ 紀久男

允章さん・リュウマチの痛み、非常に辛いという。痛みで眠れぬ夜は妣を想うと・・・とても

切ない。

盛雄さん・厳しく辛い話はよく聞きます。進行止める医学を信じます。

臚より臚へ通ふ猫の道

孤舟

惠洲さん・臚から現れて臚へ、で春の猫の感じが良く出ている。

隆さん・考えてみれば「人生は臚」である。くつきりしたところは何も無い。毎日届く

新聞の記事は人生が臚である一つ証。誰もが臚な人生を歩いている。ため息が

でそうな名句である。

七分咲き愛でつ独りの花見かな

健介

龍平さん・朝散歩の小公園にサクラの木があつて今年も独り花見の日々 これ又宜しき

趣き也

若冲の墨の満月ひかる春

千恵

敏郎さん・若冲の素晴らしさは色彩だけではないはずです。

春眠の底をゆらして夜の地震

惠洲

孤舟さん・天も地も引つ繰り返りそんな大地震。

患ひの床(とこ)に届くや山桜

啓子

孤舟さん・桜見物に出掛けられない臥せた身へ山桜を届けるというお見舞い心の深さ。

練焼くたよりなき身をほぐし食む

亜也

忠彦さん・焼練は香ばしいのですが身が柔らかく頼りない感覚を自分の事と感じている句と

思います

火の散華舞台を飾るお水取り

けい子

孤舟さん・堂縁から零れ落ちる火の粉は豪華絢爛。

ただしげさん・スケールの大きさが目に浮かぶ。

浩さん・勇壮な儀式に訪れる春の息吹を感じます。

紀久男さん・大阪の独身時代、会社帰りに見物に行き、夜明かしたことを思い出しました。

四点句

逃水を追ひ逃水に囚はるる

孤舟

惠洲さん・・・追うのは普通だが囚われるのは珍しい。

菜の花の苦み楽しむ辛口酒

忠彦

孤舟さん・・・菜の花のお浸しは酒の肴に最適。辛党の味方。

ただしげさん・・・共感します。

猫背また進む春寒の鏡かな

惠洲

孝さん・・・猫背と春寒がひびき合って身につまされる秀句です。

虚無僧のくらやみ坂を下る春

正明

惠洲さん・・・虚無僧と暗闇坂の取り合わせの妙。

堂哉さん・・・映画のワンシーンを見ているようです。虚無僧を最後に見たのは何時のことか。

縁ありし家の築山諸葛菜

啓子

隆さん・・・上五は何だろうなと思うが、諸葛菜は種が飛ばされて花が咲く。青紫の花びらは

高貴な感じですよ。「諸葛菜いずこから飛びしか庭山に」でも。

啓蟄や妻病院を出て生還す

天牛

健介さん・・・拙句、「麻酔で宇宙より帰還寒風ぬ」に状況同じで感慨。

三点句

子に伝う播磨屋の芸春芝居

ただしげ

紀久男・・・吉右衛門の当たり役「時今也枯梗旗揚」の光秀を娘婿の菊之助が初役で大評判（音

羽屋の型ではなく）。国立劇場の歌舞伎教室に小中学生の孫二人も大喜びでした。

陽炎をもぐもぐ咀嚼牧の牛

孤舟

惠洲さん・・・陽炎を咀嚼すると見た面白さ。

風捉え戦始まる風の陣

孤舟

惠洲さん・・・風を戦わせる勇壮感が感じられる。

紀久男・・・新潟・白根の風合戦。信濃川の両土手で六角風。

花見酒酌めぬ花見となりけり

ゆたか

盛雄さん・・・近くの夙川堤の花見もそろ歩きだけのものになりました。作者の気持ちが

「なりにけり」で充分に伝わって来ます。

変わる世を追うさびしさよ梅散りぬ

雅夫

浩さん・・・華やかな桜に比べいぶし銀のような梅の様子が愛しい。

ウーバーの漕ぎ抜けてゆく花の客

びん

孤舟さん・・・花見の宴会にウーバーの出前が自転車で届く。

リモートもあれど卒業別れ行く

亜也

隆さん・・・卒業と別れは重複。「一年（ひととせ）のリモートありて卒業す」。

二点

ひとけ無き原発の村風寒し

そらお

（飯館村など帰還困難地のTV映像から）

盛雄さん・・・国民として目を背ける事の出来ない大事、類似句は多いが選句致しました。

春一番友の新著に祝杯を

紀久男

孤舟さん・・・五郎太さん、ご労作のご上梓おめでとございます。

のどけしや野鳥談議の飲み仲間

紀久男

盛雄さん・・・釣り談議、ゴルフ談議も楽しいが野鳥をサカナに一献とは奥ゆかしい。上五で

決まった佳句。

あちこちを治し退院梅の花

忠彦

眞希子さん・入院の辛さを「あちこちを治し」という表現で軽みまでひきだしながら、梅の花 退院後新たな出発への凜とした決意を感じさせられました。退院おめでとう
います。

野火猛て頻りに変はる風の向き

孤舟

恵洲さん・野火の勢いの変わるさまが捉えられている。

晴れた空陽だまりの猫水温む

ただしげ

浩さん・うらかな春の良い天気的情景が目には浮かぶ。

島なみの写真が届き暖かし

五郎太

孤舟さん・瀬戸内海の春が懐かしく思い出される。

紀久男・数年前亡くなった則安くんが「しまなみ海道」のボランティアガイドをしていた頃、何度も誘われたのに行けなかつたのが心残りです。

風吹けどやせがまんして春コート

千恵

浩さん・心境が良くわかります。

満開の桜の先に蒼き天

千恵

ただしげさん・下五の表現が良い！

ほお白の番で遊ぶ庭の木々

雅夫

紀久男・原句の下五「花馬酔木」を季重なりのため、勝手に添削して投句。頬白は繊細な
轉り声で有名ですが、人の気配を感じると樹林に姿を隠します。広いお庭に番で
遊ぶとは羨ましい環境です。

山の湯や近くて遠き伊豆の春

びん

ただしげさん・行きたくても行けない感が共感できます。

しだれ梅大きく地を張り山の主

けい子

五郎太さん・下五「山の主」が良い。

三・一一草萌ゆるとて道半ば

盛雄

ただしげさん・十年過ぎても進んでいない現実胸が痛む。

一点

空目指し昨日今日明日クロッカス

堂哉

孤舟さん・一日一日と咲きそろってゆくクロッカスの生命力が感じられる。

瀬戸の海かもめ飛び交い風光る

ゆたか

規雄さん・カモメが春風に吹かれてゆったりと飛び交っている。長閑な一日。いいですね。

久方の水揚げ浪江の白魚

啓子

紀久男・風評被害を受けましたが、東北物産展で魚介類、清酒を積極的に買い求め賞味
しております。

変異猛け春腥し新戦場

びん

紀久男・コロナの変異種が欧州中心に日本でも拡大しており、中七と下五の表現に凄みが
あります。



次回青葉会

四月二十二日（木）井の頭公園吟行（雨天決行） 午前十時 吉祥寺駅前「花子象」前集合

午後一時半～五時 句会・御殿山コミュニティセンター

（武蔵野市御殿山1-5-11 ☎0422-48-9309）

※吟行参加者は所定の時間場所に集合が望ましいですが、事情によつては直接コミュニティ

センターへお越しいただいても結構です。

ランチは三々五々召し上がつてご参集ください。

当季雑詠5句 投句は3句までで、四月二十日（火）夕方までと致します。



令和三年三月 青葉会報

一、今回は新著を上梓された五郎太さんはじめ8名出席。投句は13名。句数総数84句。

啓子さん持参の、志乃多寿司、チーズケーキ、千恵さんの純吟「蓬萊」（飛驒）、五郎太さんの純吟

「醸し人 九平次」（名古屋）、小生の純吟「八海山」、煎餅などを賞味しつつ句会に入り、ご覧のように

そらおさん、忠彦さん、正明さん、啓子さんらが高得点でした。

二、五郎太さんの新著はすこぶる好評で出席できなかった諸先輩や産経新聞の稲垣真澄さんらもベタ褒めで小生も誇らしい思いです。句会は忽ち出版記念会の様相を呈し、五郎太さんの地酒「九平次」（原料は米国産山田錦）と啓子さんからのチーズケーキ（那須チーズファクトリー）とのマリアージュが素晴らしく、久しぶりの集まりであったことも相俟つて、たいへん盛り上がりましたことをご報告いたします。

三、回覧

(一) びんさんの翻訳・ハインリッヒ・ハラ著「新編 白い蜘蛛」（山と溪谷社 2000年9月10日初版

525頁）

(二) 孤舟選者主宰の「爽樹」3月号

(三) 眞希子さん、天牛さんらの『S』、江戸文字勘亭流で日本舞踊坂東流のお名取や師範免状を書いてお

られる啓子さんからの三名分の千社札（今後おいおい皆さまの分を書いて下さるそうです）。

四、関係者近詠

人心か摂理か教会風化す	眞希子	点滴のまだるさに焦れ年の行く	陽亮
雪籠めに人声喜ぶ鳥骨鶏	全	惠贈句集側目（そばめ）にかけて越年す	全
片隅に文語の聖書淑気満つ	全	初詣親子そろつて表付（おもてつき）	全
盲人の不様と瘤撫で初笑	全	お正月はらから寄り合ふこともなく	全
三代に三様の聖書寒棒	全	初芝居疫病を祓ふ睨みかな	紀久男
寒林や人ならぬ音ついてくる	弘子	寒禽や餌ねだりをる声の鋭し	全
荒船山冬空たひらに画しをり	全	獅子舞の甘噛み照れる母娘（ははこ）かな	全
観能へ静かな列や花八手	全		
シクラメンが二階の窓に数寄屋橋	全		

「森の座」4月号

櫛の芽や墓のみの故郷遠し
一生は早し万朶の花の下
料峭のワイングラスの曇りかな
春雨や赤提灯消ゆ宵八時
観梅や久瀾叙せど名前出ず

盛雄 春雨や嫺々として平家琵琶 紀久男
全 今年こそ猛虎トップの春きたる 全
全 牙返る東北地震(なゐ)の余震てふ 全
健介
全

きよひさぎ句会 三月

をちこちにかたまつて咲くすみれかな
ささやかな二人の宴花の下

允章 お元気でとエールかけあう春日より 田部修司
全 (広島の美酒一升瓶に添えて一句あり。四月吟行に
持参します)

下萌えて雀ちよんちよん燥(はしゃ)ぎけり 規雄
「NHK俳句」(4月号)に佳作。 西村和子・選

五、日経新聞の夕刊コラム「明日への話題」に黛まどかが二月から登場しております。

小生が最頂していた三津五郎が彼女の句会メンバーだったことがあり、「楽屋句会」の選考を依頼しよう
としましたが、偶々彼女が文化庁の文化使節として俳句の講師でパリに派遣される前日であったため断
念したことがありました。(因みに現地通訳は亡き副島勲先輩の娘さん・海老蔵パリ公演の折、彼に
仏語を特訓)彼女の作品は小生好み多く、今後いろいろ紹介したいと思っております。
三月十四日は鈴木真砂女の命日で二句掲載の内一句を。

「戒名は真砂女がよろし紫木蓮」

六、孤舟選者の近詠

ブーメラン秋の空より不時着す
赤げらに心の扉叩かるる
名月や紙を丸めて遠眼鏡
太陽の句のする子七五三
浮世絵のをみなも濡るる小夜時雨

——「爽樹」3月号

薄暑光盲導犬は眼閉ぢ

——俳句年鑑 2021年版

流水や浦曲の春の整はず
露の薑少女の恋の予感して
山焼く火風を捉へて彷徨す
星空の瑠璃の泪やいぬふぐり
薄暮より宵へ野梅の空動く
潮騒の届く舟屋や春時雨
老梅や人の若さの妬まるる
野火猛り阿鼻叫喚の迫り来る
修二会の火心の鬘を炙り出す
八重椿島の夕日は海へ墜ち

——「俳壇」二月号

令和三年四月六日

紀久男 記